生きもの博物誌

【ジュズダマ】
ミャンマー

観光資源としての植物

落合 雪野
（おちあい ゆきの）

鹿児島大学総合研究博物館准教授

天然素材の再評価

二〇〇六年一一月、およそ三年ぶりにアカ族の村を訪れた。この村はミャンマーのシャン州東部、チェントン郊外にある。なだらかな山の斜面に家々が建ち並び、その先に水田が広がる景観はまったく変わらない。だが、今回は見たことのないものが目に飛び込んできた。

村のあちこちに、首飾りや腕輪、バッグ、衣服といった手工芸品を売る店ができている。家の軒先にぶら下げる人もいれば、竹竿にかけて洗濯物のように陳列する人もいる。しかもその商品には、大量のジュズダマのなかまの種子が使われていた。

種子のビーズ

ジュズダマは、イネ科の植物である。日本でも水路や空地などに生え、夏のおわりから秋にかけて灰色の種子を実らせる。この種子はかたくて、つやつやしていて、しかも糸を通す穴が開いているので、ビーズとして使うことができる。ジュズダマのなかまの野生植物が集中的に分布している東南アジア大陸部では、人びとがその種子を使ってさまざまなものを作ってきた。

なかでも、タイ北部やミャンマー東部のアカは、多様なかたち、色、大きさの種子を使いわけて、帽子や衣服、アクセサリーを飾ることに特色がある。その実践、あるいは変化の現場に立ち会おうと、わたしはアカの村々を回っているのである。

前回調査した村の住民は、むかしはもっぱら種子だったけれど、最近はかわりにプラスチックのビーズを使うことが多くなった、残った種子も少なくなったと語っていた。ところが今回は、大量の種子を使ってジュズダマ製品を作り、販売していたのである。畑や庭の一角に植えられた植物も観察できた。この変化は、どのようにしておこったのだろうか。

研究活動の波紋

家々を回って住民に話を聞くうち、意外な結果があきらかになった。変化の原因はわたしだったのだ。

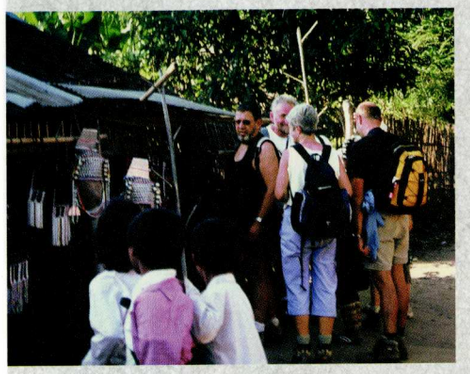
前回の訪問で通訳をしてくれたガイドは、わたしと住民の仲立ちをするうちに、研究者の関心を理解し、ジュズダマの文化的な価値を認めるようになった。その後、観光案内にジュズダマの説明を加えると、地域の植物について知識をえた観光客は、プラスチックを使った手工芸品を避け、ジュズダマ製品を求めるようになったという。この需要に住民が応じ、現在にいたったのである。

この現象の背景には、最近のチェントンにおける観光産業の拡大がある。また、村は市街から近くアクセスしやすいうえ、周辺の村々をつないだ平坦なコースで手軽なトレッキングを楽しむ観光客も多い。つまり、もともと手工芸品を販売しやすい条件にあったところに、研究者が情報を与えた結果、現金収入をえることのできる植物としてジュズダマが認知され、急激な商品化を招いたのである。

自らが継承してきた植物利用の文化を基礎に、ジュズダマを観光資源として活用するアカの村は多い。その様子を見聞きしてきたわたしが、まさか流れの一部になるとは思いもよらなかった。この村の一件が、ささやかな研究成果の還元の機会となるのか、それともただのおせっかいにおわるのか、今後の行方が気がかりである。

バナナやパパイヤといっしょに畑で栽培する。
手前にまとまって植えてあるのがジュズダマのなかま

製品を作り、翌年種まきをするための種子



店に集まった観光客

女の子用ヘッドドレスに、
白い種子を縫いとめる

女性の盛装用ジャケット。
カラフルなパッチワークを囲むように
白い種子を縫いとめる。
また、白い種子を半分に割ったものを
つなげて、房飾りにしている

竹竿に手工芸品を並べる

ジュズダマ（学名：*Coix lacryma-jobi* var. *lacryma-jobi* L.）

イネ科の多年生植物。インド東部から東南アジアを中心にジュズダマ属の野生種、6種類が分布する。ジュズダマはそのなかの一変種で、世界の熱帯、亜熱帯に広く分布し、耕地や集落周辺など、人里の攪乱環境に生育する。植物体全体が薬用植物となるほか、かたい種子が物質文化に利用される。なお、ハトムギは、ジュズダマを祖先野生種として栽培化された穀類で、東南アジア、東アジアを中心に食用、薬用に栽培される。